えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

EDO-TOMO
えど友

第128号
令和8年
(2026)
9 － 10

江戸東京博物館友の会会報

目次

大きく広がった交通ネット・・・東京の地下鉄 ……1～3
えど友広小路
　サークルだより／翻刻だより／友の会めも ……4～5
第 22 回定期総会開催のご案内 …… 5
友の会セミナー「江戸の災害～二大噴火について」…… 6
見学会「我が町」両国界隈を歩く …… 7
特別展「洋館　明治の夢と挑戦」観覧記 …… 8
えど東京一景(32) －神田神保町古書店街－ …… 9
江戸東京ミュージアム探訪②
　[したまちミュージアム]……10
催事案内／会員優待のお知らせ ……11～12

大きく広がった交通ネット・・・東京の地下鉄

令和３年５月発行『えど友』120号のトップ記事「明治時代の交通ネット」で人力車から馬車鉄道、電車の推移を書きました。その後の時代、交通ネットはどのように発展、拡大していったのでしょうか。現在、都市交通で大きな比重を占めている地下鉄、その地下鉄の始まりから簡単に流れをまとめました。

地下鉄の始まりはロンドン

一体誰が地面に穴を掘って、そこにトンネルを通し、乗り物を走らせようとしたのだろうか、というのが素朴な疑問でした。なにも地面を掘り返さなくても、そのへんの土地に車を走らせればいいのではないか、と。

理由がありました、それなりの事情がありました。場所は19世紀半ばのロンドン、大英帝国の首都ロンドンの市中は多くの建物が密集し、狭い道路は乗り物や人で大混雑するのが日常化し、歩くのにも難渋していたようです。この渋滞を解決するための策として、地面に穴を掘って乗り物を走らせる、それが地下鉄の始まりでした。開業したのは、まだ電気がなく蒸気機関車が引っ張る時代の1863年１月でした。その開業の前年にはイギリスの大蔵大臣など政府高官を乗せた車両を使って地下鉄の試運転を行っています。その写真にはトロッコのような車両に綺麗に着飾った紳士たちが居並び、驚いたことにご婦人の姿もありました。試運転が終わったあと、煤煙で黒くなったお互いの顔が見ものだったでしょう。それからイギリスらしいことがもう一つ、トンネルの中は煤煙でいっぱいだったのですが、その車内には禁煙という文字が掲示されていました。

この試運転のあと、機関車の煤煙からいかにして乗客を守るか、奇妙奇天烈な方法がいくつか考案され実行されましたが、ここでは省略します。

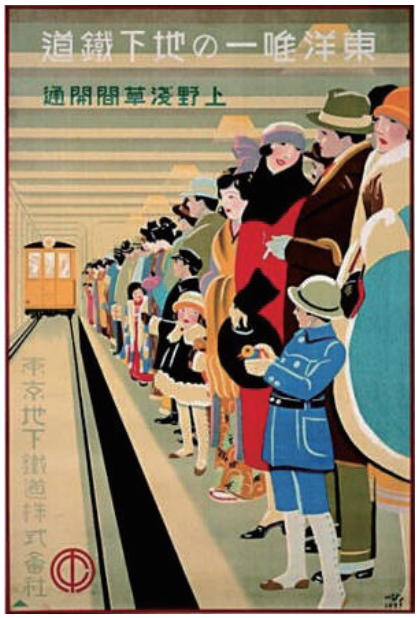
▲ロンドン初の地下鉄「メトロポリタン鉄道」建設工事の様子

計画は明治からあった

日本で、地下鉄道建設が実際に動き始めたのは昭和２年(1927)ですが、計画自体はもっと早くからありました。明治39年(1906)12月に東京地下電気鉄道株式会社が新宿―銀座、高輪南町―浅草の二路線の建設計画を申請しています。が、その申

▲東京地下鉄道株式会社を創設した早川徳次（地下鉄博物館展示）

請は時期尚早だったのか、大正２年(1913)に却下されました。その後、同６年７月に東京地下鉄道株式会社(旧名・東京軽便地下鉄道株式会社)が品川―浅草、上野―南千住の二路線について建設の申請をしました。東京市はこの申請に対して、条件付きで許可する答申をしましたが、この答申で一悶着起きています。明治が終わるころ、公共交通機関は民営か公営かをめぐって、議論が沸騰紛糾し、結果、なんとか公営に落着いていたからです。つまりこの答申は、市内交通は市営とする定めを崩すことになり、それならわしも、私もと多くの会社が、資本強化をし、吸収合併をして地下鉄建設の申請に邁進



▲「東洋唯一の地下鉄道」ポスター
(杉浦非水原画)

▲開業当時の地下鉄上野駅入り口

▲地下鉄上野駅ホーム（絵はがき）

▲国指定有形文化財「日本初の地下鉄車両
1001 号車」(地下鉄博物館所蔵)

しました。しかし、第１次世界大戦による経済不況や関東大震災(大正12年)による世情混乱の影響で、地下鉄建設の着手は頓挫してしまったのでした。

ということで、最初に地下鉄が動きだしたのが、東京地下鉄道株式会社の浅草―上野間(2.2km)で、これが昭和２年(1927)12月でした。

その12月の暮れも暮れ、押し迫った30日に浅草―上野間が開業しました。開業初日には朝６時の始発前から大勢の人々が各駅に押しかけ、午前中だけでも４万人を超える乗車数がありました。その頃の改札システムは変わっていて、乗車する人は10銭硬貨を改札機に投入、すると十字型の錠が外れて、45度回転して人を通す仕組みになっていました。区間が浅草から上野までの近距離で、運賃が均一だったからできた仕組みですが、いわば自動改札の先駆けでした。この仕組みはお客さんに珍しがられましたが、残念ながらわずか４年で姿を消しました。同６年に運行区間が延び、均一運賃が無くなったためでした。

▲地下鉄浅草駅（上）と上野駅（下）の改札口
(絵はがき)

▲ターンスタイルの自動改札機（再現品）
(地下鉄博物館所蔵)

デパートと共に発展

こうして、浅草―上野間の営業は大好評でしたが、そのあとの路線拡充には苦戦が続きました。といいますのも、一般道を造るのと違って、地下道を掘る作業にはとてつもない費用がかかったからです。それに、当時は世界恐慌の嵐が吹き荒れて資金調達が難しい状況でした。そんな中で、手を差し伸べてくれたのが、地下鉄の集客効果に注目したデパート業界でした。最初に名乗りを上げたのが三越で、三越本店と直結した駅を建設することを条件に、その費用を全額負担する、と申し出たのです。こうして誕生した駅が三越前駅で、開業当初から利用者は地上には出ず、そのままお店に入ったり、当時は珍らしいエスカレーターを使うこともできたのです。

▲地下鉄三越前駅開業当時に設置された「三越
地階売場　地下鉄入口」のステンドグラス
（Ａ５出入口に現存）

このあと、上野にある松坂屋から同様の提案が出され、上野広小路駅が誕生します。銀座駅の建設では銀座松屋と銀座三越がそれぞれ資金の一部を提供しました。こうして、デパートには多くの買い物客が訪れるようになり、地下鉄の会社には多額

の運賃収入が見込まれるようになりました。地下鉄、デパート共にウィンウィンの状態だったのです。

▲地下鉄銀座駅ホーム（絵はがき）

以上を延伸区間でまとめますと、昭和７年12月に上野―京橋間、９年６月に京橋―新橋間が開通しました。

▲地下鉄新橋駅開業（絵はがき）

別の会社、東京高速鉄道株式会社による新橋―渋谷間の開通のあと、14年９月には両線の相互直通運転(浅草―渋谷、13.2km)を走らせるまでに発展しました。が、動きはここまで、満州事変の勃発や第２次世界大戦への参戦などの影響で建設自体がストップしてしまいました。

第2次世界大戦以降の動き

第２次世界大戦に日本が突入した昭和16年の７月に、上記２社などの営業路線や免許線を統合した形で帝都高速度交通営団が発足しました。筆者が九州の田舎から上京してきた時期は、それから20年余りたっておりまだ銀座線と丸ノ内線しか走っていませんでしたが、帝都高速度交通営団の帝都という名称に異様な感じ

▲昭和 29 年（1954）に製造された丸ノ内線 301 号車（地下鉄博物館所蔵）

▲日比谷線開通式

を受けたのを覚えています。その丸ノ内線の建設が始まったのは26年で、開通(池袋―新宿間、16.6km)したのが35年11月でした。この後、日比谷線は39年８月、東西線は44年３月、千代田線は53年３月、有楽町線は63年６月、南北線は年号変わって平成12年９月、半蔵門線は15年３月、そして副都心線が20年６月と地下鉄の路線は拡大していきます。

当時、営団という名で親しまれていた帝都高速度交通営団は、平成16年４月に消えて、地下鉄と付帯事業のすべてを東京地下鉄株式会社に引き継ぎました。いわゆる東京メトロがここで誕生しました。

都営地下鉄の動き

東京都は早くから都内交通の独占、いわゆる都営一元化を考えていましたが、戦後までその考えは尾を引いていました。昭和21年10月に設置された地下鉄問題協議会では、この都営一元化論と営団の経営方式を固執する論が対立を続けましたが、都からは営団による新線建設が遅々として進んでいないことが指摘されています。さらに帝都高速度交通営団の廃止まで議論されましたが、これは運輸省(当時)の反対で潰されています。27年８月には、首都建設委員会が首都における陸上交通事業の整備促進に関する件を協議し、「営団が直ちに建設を行わない路線を東京都、または他の企業体が実施できるようにする」ことが提示されました。その後、種々協議、検討された末、やっと33年３月に営団が所有していた浅草線を東京都に譲渡することが決まりました。

▲都営１号線（浅草線）開通式

地下鉄のどの路線でもそうですが、一度に全線が開通・開業したわけではなく、順次区間ごとにトンネルは掘られ、開業していきました。都営の浅草線を例に説明しますと、最初は35年12月に浅草橋―押上間が開業、37年５月に浅草橋―東日本橋間、同年９月に東日本橋―人形町、翌年２月に人形町―東銀座、同年12月に東銀座―新橋、39年10月に新橋―大門、43年６月に大門―泉岳寺、そして同年11月に泉岳寺―西馬込間が開通し、ここで押上―西馬込間全線が開通となりました。全線が開通するまで、工事が始まって約10年もかかっています。この後、三田線、新宿線、大江戸線……と開通していきました。なお、当初は、路線は１号線とか６号線などと呼ばれていましたが、昭和53年７月に路線呼称が指定されましたので、ここでは便宜上、呼称名を使いました。

東京の地下鉄網は、大網をまき広げたように、あるいは蜘蛛が巣を張りめぐらすように広がり、その先ではＪＲや私鉄につながっています。路線図が手元にないと迷ってしまいそうですが、慣れてしまえば、便利このうえありません。路線図片手に乗ったことのない路線に乗り、降りたことのない駅で降りて、思いがけないものを見つけて楽しむ地下鉄ツアーはいかがでしょうか。

参考資料：『東京百年史』東京都
『日本の私鉄　東京地下鉄』広岡友紀著　毎日新聞社
『地下鉄の歴史』佐藤信之著　グランプリ出版
『東京メトロのひみつ』PHP 研究所

【取材】文：元広報部会・福島 信一
写真：広報部会・菊池真一

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

6月16日(火) 上野鈴本演芸場で常設の寄席を鑑賞。寄席らしく、落語の他にも、大神楽曲芸、漫談・漫才、マジック、浮世節などの色物もあり、入れ替わり・立ち替わりの芸を楽しむことができた。落語は前座を含め9名の演者が登場。トリを除けば一人の持ち時間が短く、サワリの部分だけになった噺が多かったが、まさに競演であった。参加者7人。

7月21日(火) ひらい圓蔵亭にて、落語をDVDで鑑賞。桂文珍「老楽風呂」桂春団治(三代目)「野崎詣り」「宇治の芝船」。春団治の落語は大阪や京都を舞台にしたいわゆる上方落語。所々に分からない関西弁が入るが独特のイントネーションやテンポが落語に味を付けている。参加者7人。

◆藩史研究会

6月12日(金) 荒井和雄さんの担当による「春日局」の勉強会。「春日局(お福)の略歴」と「春日局(斎藤福→稲葉福)の系図」について学んだ。後半は尾形宏さんの解説で「本丸御殿と天守」のビデオを鑑賞した。参加者8人。

7月10日(金) 鶴谷博幸さんが越前国丸岡藩(現福井県坂井市)の発表を行った。織田信長の重臣柴田勝豊が丸岡城を築城。丸岡城主は柴田氏、安井氏、青山氏、今村氏と代わった。寛永元年(1624) 福井藩主の交代により本多成重が城主となり、丸岡藩(5万石)が成立。本多家が4代続いた後、有馬清純が藩主となり、8代にわたり有馬家が丸岡藩を治めた。丸岡藩の西に位置する三国湊は海運の要衝である。柴田勝家・今村盛次は保護を図っていたが、福井藩の「沖の口条目」や幕府の異国船改の励行により検問が厳しくなり、丸岡藩は大きな打撃を受けた。本多成重が福井藩の改めに抗議したが聞き入れられず、以来、滝谷は湊町としての機能が果たせなくなった。現在、三国湊には江戸以来の風情が残り、坂井市の観光スポットになっている。参加者9人。

【新入会員募集】

募集人数　5名程度、 連絡先　藩史研究会世話人　鶴谷博幸、 電話番号　090-3049-0195

◆古文書を読む会

6月8日(月)「老のをしへ」を読む。お茶と囲碁は執着すると陰気になるのですすめない。後半は徒然草の163段～169段を読む。年老いても一つの道に優れているのは立派な事であるが、老人がそれを自認し、若者の間に交わって、自己顕示することはどうか。参加者6人。

6月22日(月)「老のをしへ」を読む。針は好まず、お灸は良いものである。後半は徒然草の170段～173段を読む。年老いた人は気力が衰え、あっさりして等閑であり、物に感じて動揺することがない。心が自然と静かであるので、無駄なことはしない。我が身をいたわり悩み事もなく人に迷惑をかけまいと心がける。今回で「老いのをしへ」は終了し、次回からは友の会古文書中級でテキストとして使用した「酒井伴四郎日記」を始める。参加者6人。

7月13日(月)「酒井伴四郎日記」を読み始める。紀州藩の下級武士が江戸勤務で故郷を出発、道中のあれこれ、江戸での飲み歩き、遊興ぶりなどが書かれている。万延(1860年)元年5月11日～13日まで読む。「徒然草」174段まで読む。参加者5人。

7月27日(月)「酒井伴四郎日記」の万延(1860年)元年5月14日～18日を読む。和歌山を出立して大坂枚方、桜ノ宮、京都伏見を経て、中山道大津宿(69番)、草津、武佐、関ヶ原、赤坂、加納宿まで。各所で大雨、川の氾濫、人家の被害に出会っている。また、道中の各所でうばが、あんころ餅などの餅をたべている。「徒然草」の176～180段を読む。蹴鞠の会が雨が降った後に開催され、庭が乾いていなかった時に、おが屑を用意する関東風は無粋で、乾いた砂を用意するのが故実に則っている。また、左義長の由来は毬杖(ぎっちょう)と呼ばれる道具を焼いた事が始まりである。参加者5人。

◆日本の大道芸伝承会

6月、7月休会。

◆江戸を語る会

6月、7月休会。

◆道灌倶楽部

6月、7月休会。

館蔵古文書翻刻だより

◆B班『類聚撰要』全51巻

休館中もA・B両班共に全員が翻刻活動を続けたいということだったので、休館中も無償で翻刻活動を続けました。

B班は休館期間中に翻刻するであろう分(第1巻～第14巻分、約千頁)を予めマイクロフィルムから複写して、メンバーに配付しました。

また、松原元会長のお骨折りで、江戸川区平井駅近くの「ひらい圓蔵亭」(八代目橘家圓蔵を襲名した、月の家円鏡として有名で、彼は生涯平井に住みました。その後区が購入して手を入れた施設です)を月2回無料でお借りして、A・B両班が月1回の会合をしています。

『類聚撰要』は、日本法制史学の泰斗・石井良助氏が収集し、後に遺族から寄贈された「石井コレクション」のうち、雉子町(現・千代田区神田司町二丁目辺り)の名主斎藤月岑(江戸名所図会を完成、出版した)が編纂した町触集の写本。弘化2年(1845)12月に名主木村定次郎、普勝伊兵衛が書き写したものです。第1巻には天保2年(1831)12月付けの凡例があります。また、第11巻は町法改正、12巻は町会所への窮民御救願関係が納められています。

友の会めも（開催日と人数）
令和８年６月～７月

◆役員会６月９日(火)７人。７月14日(火)９人。◆事業部会６月２日(火)９人。７月９日(木)12人。◆広報部会６月16日(火)６人。７月21日(火)７人。◆総務部会６月23日(火)７人。７月28日(火)９人。◆古文書講座 入門編：６月20日(土)69人。初級編：６月17日(水)89人。中級編：６月12日(金)39人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト６月18日(木) B班２人、在宅作業３人。６月25日(木)A班４人。７月16日(木)B班２人、在宅作業３人。７月23日(木) A班４人。

投稿募集！

「えど友広小路」欄を126号から再開しました。以前と同様に会員投稿の募集をいたします。

いつもみなさんが身の回りで見つけた、ちょっとした江戸や東京に関連するエピソードを書いてみませんか？ 文字数は1000字程度で、サークル活動の様子や友の会の催事に参加した感想など何でも結構です。

原稿は事務局に送るか、広報部会のメールアドレスに添付して送っていただくこともできます(送り先は下部参照)。

たくさんのご応募をお待ちしています。なお、応募の際、ペンネームなどの使用はご遠慮いただいておりますので、ご了承ください。

はがきの場合：〒130-0015 東京都墨田区横網 １－４－１
江戸東京博物館友の会
メールの場合：edotomo2001@gmail.com

第22回定期総会開催のご案内

江戸博長期休館後初の総会で、今後の友の会の活動を確認しよう

江戸博長期休館後初となる友の会定期総会が９月に開催されます。定期総会は会員が一堂に会し、過去の活動を振り返るとともに、本年度の活動について率直な意見交換のできる場です。2022年４月から大規模改修工事のため長期休館していた江戸博は、2026年３月31日にリニューアルオープンしました。長期休館中友の会はどのような活動を行っていたのか、今後どのように活動を進めていくのかを総会で確認しましょう。

同封された議案書をご検討・ご確認の上、多くの会員の皆さまに2026年度の活動へのご理解を深めていただけるよう、ご出席をよろしくお願いいたします。開催要領は以下の通りです

●2026年度　友の会定期総会

日時：９月13日(日)13時15分開会
会場：江戸東京博物館　１階大ホール

◇主な議案
第１号議案：2022年４月～2026年６月まで事業報告ならびに収支決算報告
第２号議案：2026年度事業計画案ならびに事業予算案
第３号議案：江戸東京博物館友の会規約の改訂
第４号議案：役員および監事の選任

●藤森照信江戸博館長の記念講演会

総会に続いて、江戸東京博物館藤森照信館長による記念講演会が予定されています。演題は「日本の住宅の原点を求めて」です。４年ぶりとなる藤森館長の講演にご期待ください。

＊講演会への参加には別途申し込みが必要です。『えど友』127号の7頁を参照してください。

＊今回は会員交流会は開催されません。

第215回　江戸東京博物館友の会セミナー（2026年6月28日）

「江戸の災害 ～二大噴火（宝永と天明）について」

講師　桐原総一さん（博物館学研究家）

はじめに

最後の富士山の噴火は江戸時代中期の宝永４年(1707)にあり、天明3年(1783)には浅間山も噴火しました。この大噴火から300年以上を経過した今も私たちは同じ場所に生活しています。繰り返す自然災害に対する心づもりを過去の災害を語る絵図や日記、古記録や実物の資料などを見ながらお話をしたいと思います。

富士山宝永噴火

富士山宝永噴火は宝永４年11月23日(新暦1707年12月16日)から12月９日(新暦1708年１月１日の未明)までの16日間に、富士山の南東斜面にできた宝永火口から噴火した大規模な噴火をいいます。噴火の約１、２カ月前に東南海地震が起き、半月前くらいからは長野、小田原、御殿場などで地震が繰り返し、噴火数日前となると江戸でもたびたび小地震があったようです。当日も朝から地震が続き、10時ごろから噴火が始まります。

伊東志摩守日記

現在の墨田区緑１丁目辺りに屋敷のあった旗本、伊東志摩守祐賢(すけかた)の『伊東志摩守日記』によると「当日は巳の刻時分から青黒い雲がわき、地震も起きて家が震え戸障子が風もないのに空振で強い音を出す。午の刻時分になると雷鳴がとどろき、黒雲に稲光がおこる。昼過ぎにはねずみ色の灰のような砂が降ってきて、この状態は夜になるまで続き降灰は二三分(約１センチ弱)積もった」とあります。このような状態は数日強弱を繰り返しながら続くことになります。

噴火口は３カ所ありますが、最初の噴火は一番下の第３火口、次に真ん中の第２火口、そのあと３日後に、第１火口が噴火して16日目に収束しました。

当時の様子は江戸や山麓の住民によって詳細な古文書や絵地図が残されており、火口が３つあるのは知られていましたが、近年の気象庁と内閣府の合同調査で、科学的なデータや古文書を網羅的に再検証した結果、３つの火口の正確な形成順序が判明しました。

体調の悪かった志摩守はこの日記を書いた半年後に亡くなります。宝永噴火の一級史料を後世に残してくれたといえるでしょう。

折たく柴の記

６代将軍家宣と７代将軍家継を補佐し、幕政の改革を主導した人物として知られる新井白石が、享保元年(1716)ごろからまとめ始めた自叙伝である『折たく柴の記』には、富士山大噴火の様子が生々しく記されています。

宝永４年11月23日、前夜の地震に続いて昼頃から雷鳴のような音が聞こえ、やがて雪のように白灰が降ってきたとあります。降灰は午後８時ごろ止むが、地鳴りと地震はそのまま。25日からは黒灰が降り始め、空中に飛散する大量の火山灰で呼吸器の疾患を起こす人が続出したとも書かれています。噴火後はさまざまな怪現象の風聞も流布したようですが、白石の記録態度は、「まのあたり見しにもあらぬ事共は、こゝにはしるさず」と慎重そのもので、情報過多の現代に生きる私たちに大事なことを残しています。

宝永噴火時の火山灰

柳沢吉保邸近くで採取された火山灰が、1996年に奈良県大和郡山市の旧家豊田家から見つかりました。

火山灰を包んでいた外包みの内側添え書きに、内神田神田橋の柳沢江戸藩邸近くで宝永４年11月23日午後12時ごろとあり、「藪田くま之助」と明記されています。当時の柳沢家の江戸家老、藪田重守の息子(幼名熊之助)が採取した灰を重守が保管し、その後柳沢氏が大和郡山へ転封された際に一緒に持ち込み、現在まで受け継がれています。

佐原で採取された火山灰

伊能忠敬の妻の祖父、伊能景利の日記(『伊能勘解由日記』)には、佐原で採取された火山灰や、小田原で採取された焼け石(火山弾)の記述があり、現在伊能忠敬記念館が所蔵しています。

浅間山天明噴火

天明３年４月から７月初旬まで断続的に活動を続けていた浅間山は、７月８日に大噴火を起こしました。

これにより噴煙・火山灰だけではなく火砕流、火山泥流が発生し、特に北側へ流れた火砕流と吾妻川流域を下った火山泥流で大きな被害を出します。中央に流下した火砕流が最大のもので、「鎌原火砕流」と呼ばれ、その流下量は１億㎥とも推定されています。昭和54年(1979)の発掘調査では、村の観音堂への石段の下で白骨化した母娘と見られる女性二人の遺体が発見され、「日本のポンペイ」と話題になりました。

被害は浅間山周辺にとどまらず、利根川水系を通じて関東平野にも及び死者は1500人前後、家屋の流出、倒壊、焼失は合計で千棟を超えるとされています。また、浅間山噴火は大量の火山灰を広範囲に堆積させました。火山灰は主に東流し、遠くは江戸、銚子にまで達し、ほぼ関東一円に堆積した火山灰は、農作物の生育にも影響を及ぼし、既に始まっていた天明の大飢饉に拍車をかけることとなりました。また、大量に堆積した火山灰は、利根川本川に大量の土砂を流出させた天明３年の水害とともに、同６年にも二次、三次の水害被害を引き起こす要因ともなりました。

レポーターからひとこと

博物館学的見地からのお話しということで、火山灰の現物や火山灰が降ったときのための防具まで持参いただき、火山の怖さを感じられました。　参加者74人。

【記録】文・写真：広報部会・中村貞子

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和８年６月７日）

「我が町」両国界隈を歩く

今回の見学会は、「我が町」両国の江戸東京博物館を中心に、昭和初期のレトロなデザインの両国西口駅前から町巡りを開始しました。

両国駅から両国橋そして回向院へ

大相撲の国技館、町を歩く関取、隅田川の流れを抑えた百本杭の案内板、ちゃんこ鍋のお店、中村部屋、享保３年(1718)創業のしし鍋の店「もゝんじや」を見て、両国橋のたもとまで進みました。両国橋は何度も流失や焼失しましたが、明治37年(1904)、元の位置から50ｍほど上流の現在の位置に架け替えられました。橋のたもとには、忠臣蔵で有名な大高源五と宝井其角の句碑、さらに進むと本所七不思議の一つ「片葉の葦」の案内板などがありました。さらに、春日野部屋の前を過ぎ、江戸にぎり鮨の与兵衛すし発祥の地を訪ねました。次いで、回向院正面跡の案内板に進み、江戸時代、回向院本堂は両国橋から望めたと聞きました。そして、両国といえば「花火」、両国花火資料館を見学し、いよいよ回向院を訪ねました 。

回向院の山門には仁王像、少し進むと左手に玉垣に囲まれた力塚。明和５年(1768)以降、寺社修復の資金を集めるため勧進相撲が行われ天保４年(1833)からは春秋２回、回向院相撲と呼ばれた定場所に発展、今日の大相撲の礎となりました。本堂では、ご本尊の阿弥陀如来、そして背後の千体のお地蔵様を拝みました。

▲鼠小僧の墓

境内では明暦大火横死者等供養塔、富士山噴火や安政大地震などの供養塔など、鼠小僧や山東京伝の墓などにお参りをしました。

吉良邸跡から芥川龍之介文学碑、そして勝海舟生誕の地へ

次いで、赤穂事件討ち入りの現場吉良邸を訪ねました。吉良邸の広さは2,500坪、現在はその86分の１が本所松坂町公園として残されています。内部には、吉良上野介義央公座像をはじめ、御首級洗いの井戸などを見ることができました。そして、両国小学校の角に建つ芥川龍之介文学碑を訪ねました。龍之介は明治25年(1892)、中央区明石町で誕生、生後７カ月で母の長兄芥川家に預けられ幼児期から青年期まで両国で育ちました。龍之介は著書『本所両国』で両国について書いています。そして、次に勝海舟の生誕の地へ進みました。両国公園には、石碑と海舟の偉業の歴史案内板が立っています。

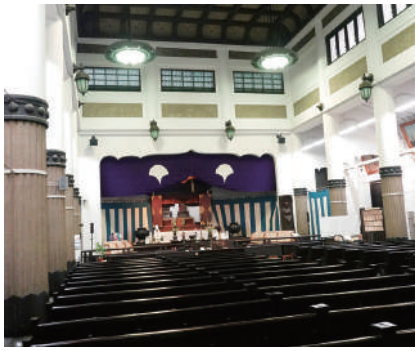
▲芥川龍之介文学碑

そして、葛飾北斎生誕の地へ

北斎は生涯93回引っ越したといわれ、80歳を超えた頃の住まいが榛（はんのき）稲荷神社近くにありました。また、この神社の近くには北斎の座像があり、参加者は北斎と並び記念写真を撮影できました。そして、総武線のガードを過ぎ、大江戸線両国駅前、北斎通りを進み、北斎生誕の地を訪ねました。次いでこの地にあった津軽家上屋敷跡、そして本所七不思議の一つ津軽の太鼓の案内板や、江戸末期に西洋砲術、品川台場建設などで国防に貢献した江川太郎左衛門邸跡の案内板を見ました。

野見宿禰神社から横網町公園へ

次に、相撲の神様といわれる野見宿禰（のみのすくね）を祀る神社を訪ね、横綱すべての名前を刻んだ歴代横綱之碑（２基）を見学しました。そして、三遊亭円朝の住居跡、元関脇の水戸泉が創設した錦戸部屋、現相撲協会理事長の八角部屋前を通過し、横網町公園に進みました。東京都慰霊堂では関東大震災と太平洋戦争の東京大空襲の犠牲者、約168,000体のご遺骨が安置されていると聞き、心が痛みました。復興記念館では関東大震災と戦災の惨禍を伝える品々、写真や絵画などを見学しました。



▲東京都慰霊堂

旧安田庭園から両国駅前へ

旧安田庭園は江戸時代大名庭園として築造され、その後安田財閥によって買い取られ、その一画に両国公会堂が建設されました。現在は公会堂の屋根を模した刀剣博物館が建てられています。庭園を出て、国技館前に進み、出発地点の両国駅前に戻り、見学会は終了しました。３時間強のとても見応えのある「我が町」両国界隈の町歩きでした。

参加者71人。

【取材】文・写真：広報部会・前田卓雄
（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

特別展「洋館　明治の夢と挑戦」観覧記

今回は江戸東京博物館リニューアルオープンを記念する２回目の特別展でした。

1章　ナマコ壁と擬洋風建築

まず東京初の洋館・築地ホテル館が紹介されていました。アメリカ人プリジェンス(1819～1891)が基本設計、大工棟梁の二代清水喜助(1815～1881)が実施設計と施工、明治元年(1868)に竣工、ナマコ壁など和洋折衷の擬洋風建築でした。三代歌川広重らによって錦絵が描かれますが、同館は同５年に焼失しました。清水はその年に日本人初設計の第一国立銀行を日本橋兜町に完成させました。同行の現存する貨幣収納箱や鬼瓦、シャンデリアなど

▲第一国立銀行シャンデリア

が展示されていました。そして林忠恕(1835～1893)は大蔵省などの官庁建築を手がけました。松本の大工棟梁の立石清重(1829～1894)が同９年に建設した漆喰擬洋風の開智学校は2019年、国宝に指定されています。

2章　建築家がやってきた
―外国人建築家と「都市風景」

明治５年の大火後の復興策としての銀座煉瓦街の建設をアイルランド人ウォートルス(1842～1898)が手がけ、同10年に完成、のちの都市形成にも影響を与えました。一方、プリジェンスは洋風駅舎の新橋停車場を完成させ、錦絵や古写真、絵葉書で当時の様子がうかがえます。そしてフランス系イギリス人ボアンヴィル(1849～1897)が工部大学校(現・東京大学工学部)講堂を手がけ、同校造家学科(現・建築学科)第一期生を教えました。イギリス人コンドル(1852～1920)は鹿鳴館を設計、明治16年に竣工。昭和15年(1940)に解体されています。「鹿鳴館 貴婦人慈善会図」や現存する長椅子、階段(一部)が展示されていました。ほかにニコライ堂、三菱一号館など多数の洋館も手がけています。そしてドイツ人エンデ(1829～1907)とベックマン(1832～1902)は諸官庁建築の全体構想図や国会議事堂案、東京裁判所案、司法省(現・法務省旧本館)案など作成し、それらの外観透視図などは壮大で驚くばかりです。幻案が多かったなか、司法省など３案は実現しています。

▲「国会議事堂案 外観透視図」(部分)

3章　開花する洋館の明治
―日本人建築家の挑戦

工部大学校教授に就任したコンドルは西洋建築の講義を行いました。六年制の残り２年間をコンドルに学んだ第一期生が曾禰達蔵(1853～1937)・辰野金吾(1854～1919)・片山東熊(1854～1917)・佐立七次郎(1857～1922)の４人で、それぞれの卒業設計図が展示されていました。片山は東京国立博物館表慶館、奈良・京都国立博物館、各宮家の邸宅など、辰野は日本銀行、旧国技館、東京駅など、曾禰は早稲田大学恩賜記念館、慶應義塾図書館旧館など手がけています。図書館内装のステンドグラスの原画や習作など展示されていました。

工部大学校前期修了の妻木頼黄(1860～1916)は東京裁判所や横浜正金銀行本店本館(現・神奈川県立歴史博物館)などを手がけています。３章展示室中央にイギリス人バートン(1856～1899)設計の浅草凌雲閣の模型がありました。辰野設計の帝国製麻ビルの写真パネルを見ながら妻木が装飾設計した大型模型の日本橋をくぐり、４章へ進みました。

▲日本橋の模型と帝国製麻ビルのパネル写真

4章　羨望の住処
―明治の洋風邸宅

上流階級の邸宅も洋風を取り入れ、その先駆けとなった辰野設計の兜町渋沢邸の写真がまず目に入りました。そしてコンドルは有栖川宮邸や岩崎彌之助高輪別邸(現・開東閣)、岩崎久彌邸洋館などを設計しており、それらの各種図面や写真などを目にできました。展示の最後は宮廷建築家・片山設計の旧東宮御所(現・迎賓館赤坂離宮)で、明治42年(1909)に竣工し、平成21年(2009)に国宝に指定されています。御所・内部のパノラマ写真を背景に、現存するサイドボード、食器台、花台付円椅子などが室内に入ったかのように配置されていました。

▲旧東宮御所内部の再現展示

多分野で洋風化が進められた明治期に、建築家たちが挑んだ夢は洋風邸宅・建築となり、当時も現代も「名所」として感動を与え、新たな夢を抱かせ続けているのかもしれません。

【取材】文･写真：広報部会･内匠屋京子

えど東京一景

(32) ―神田神保町 古書店街―

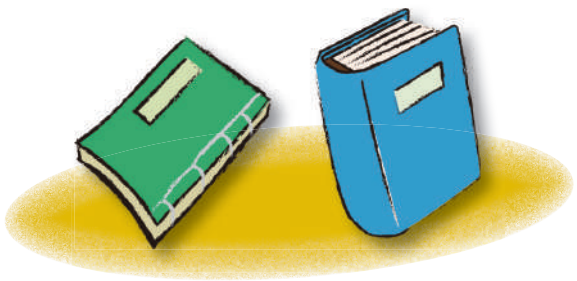
地下鉄神保町（じんぼうちょう）駅から地上に出ると、靖国通り沿いを中心に多くの古書店が立ち並んでいます。横目でのぞき込む人、店頭のワゴンの本を手に取る人、店の中で書棚を回る人と様々ですが、まだまだ「紙の本」のファンは多いようです。

神保町の名の由来は、元禄２年(1689)に屋敷地を拝領した旗本神保長治の屋敷前が「神保小路」と呼ばれたことによります。明治時代になると、東京大学をはじめとして官立学校・私立学校がこの周辺に設立されて学生街が形成され、学生相手の書店が次々に開業していきます。並行して出版社も数多く創業し、神保町は「本の街」となりました。一方、「明治の神田大火」(明治25年・1892)・「大正の神田大火」(大正２年・1913)など何度も大火に見舞われ、大正12年の関東大震災では一帯が焼け野原と化してしまいます。しかしその都度復興し、昭和初期には看板建築の建物が並ぶようになります。昭和20年(1945)には何度も神保町周辺に空襲がありましたが、古書店街は奇跡的に焼失を免れました。昭和35年に神田古書店連盟により始まった「神田古本まつり」は多くの人々で賑わい、秋の風物詩となりました。

近年の出版不況の中で神保町の古書店も徐々に減少してきていますが、本を愛する人がいる限り古書店街も残り続けると思います。古書店の散策の合間には中華料理店やカレー店で食事をするも良し、喫茶店で読書をするも良し、と本の街神保町の楽しみは尽きません。

【取材】文：広報部会・菊池真一
イラスト：元広報部会・福島信一

「神田古本まつり」の様子



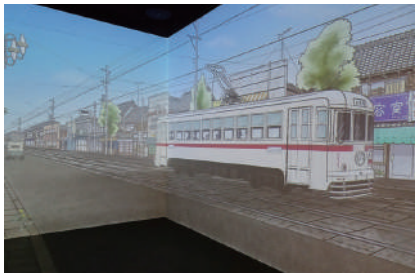
江戸東京ミュージアム探訪 ……❷

［したまちミュージアム］

上野公園の不忍池のほとりに、土蔵造り風の建物の「したまちミュージアム」があります。台東区を中心とした下町地域の文化や伝統を後世に伝えるため、昭和55年(1980)に「下町風俗資料館」として開館以来、幅広い世代に親しまれてきましたが、令和７年(2025)に名称変更してリニューアルオープンしました。

１階　再現展示室

受付から再現展示室へ進むと、昭和30年代の台東区坂本(現根岸三丁目)の表長屋・裏長屋・路地が再現されています。表長屋は金杉通りに面しており、アニメーション映像で通りの町並みや都電・自動車・人の往来が臨場感たっぷりに表現されています。映像には朝昼晩の様子が描かれており、通りの一日を体感できます。



▲金杉通りの映像

２軒続きの表長屋では提灯屋が営まれており、作業場では提灯の上下の部分を固定するために使用する金床(かなとこ)や金槌、文字や色を入れるための絵筆が展示されています。提灯は祭礼の多い下町ではなくてはならない必需品で、この店は江戸末期からありました。作業場の奥に進むと台所と水洗便所があり、勝手口から裏路地に出られます。

▲提灯屋の正面

表長屋脇から路地に入ると２階建ての裏長屋がひしめき合って立っており、その一つが紙芝居屋でした。玄関を入ると上がり框(かまち)があり、お菓子の入ったガラスの瓶や木箱があって、紙芝居ができない雨の日には、子供たちがお菓子を買いに来たそうです。玄関の脇には紙芝居の自転車が置かれていて、懐かしさを感じました。

▲紙芝居屋の内部

２階　常設展示室

２階に上がるとすぐ、ちゃぶ台を中心として、昔の生活道具を衣・食・住・商・職の分類で並べた導入展示があります。背景のスクリーンでは台東区の歴史をたどる映像が上映され、当時の暮らしを想像することができます。

▲導入展示

左手にある常設展示室では、台東区を中心とした下町地域の文化や出来事などを、時代を追って思い起こすことのできる資料が、壁沿いの展示ケースに展示されています。生活用品・地図・写真などの他、生活風景を立体絵で表現したケースもあります。「江戸から続く下町の文化と暮らし」「関東大震災と復興」「戦時下の暮らし」「焼け跡からの出発」「私たちの台東区へつながる暮らし」という構成になっています。

▲展示ケース

また、展示室の中央ケースでは、季節や年中行事に関する展示、テーマに沿った収蔵資料の展示が行われます。これまでに「お花見の季節」「祭礼」「下町の夏のくらし」「櫛・簪(かんざし)・笄(こうがい)」などの展示が行われており、その時々で異なる雰囲気を味わうことができます。

▲常設展示室中央の展示

３階　企画展示室・下町情報コーナー・昔の道具体験

今まで公開されていなかった３階も見られるようになりました。企画展示室では常設展示とは異なる切り口で、多彩な企画が楽しめます。下町情報コーナーではタッチパネル操作により当館の所蔵資料について詳しく調べることができます。また、昔の道具体験として、けん玉・メンコ・お手玉などの玩具、風呂敷・きせるなどの生活道具を自由に手に取ることができます。

３階の窓からは不忍池が一望でき、季節ごとの風景も楽しめるようになりました。上野公園の散策の途中で、ぜひお立ち寄りください。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

催事案内

古文書講座

すでに申し込みは終了しています。

●日程と担当講師は下記の通りです。

◆入門編：各日午前午後の２クラス(午前か午後を選択)
- 講師：世川祐多先生(外務省外交史料館　主査)
- 開催日：９／19(土)、10／17(土)、11／14(土)

◆初級編：各日午前午後の２クラス(午前か午後を選択)
- 講師：安藤奈々先生(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：9／16(水)、10／21(水)、11／11(水)

◆中級編：各日午後のクラスのみ
- 講師：吉成香澄先生(徳川林政史研究所非常勤研究員)
- 開催日：９／25(金)、10／９(金)、11／20(金)

- 時間：10:30～12:30　午後＝14:00～16:00
- 会場：江戸博　１階 会議室
- 定員：各クラス　70名(会員限定)
- 参加費：講座ごとに、全3回3,000円(事前一括払い・振込)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

見学会

巣鴨　～おばあちゃんの原宿を歩く～

◆「おばあちゃんの原宿」と呼ばれ親しまれている「巣鴨地蔵通り商店街」は旧中山道、江戸時代には日本橋から最初の休憩地、旅人を見守っている真性寺の江戸六地蔵もあり大いに賑わいました。街道の様子は江戸名所図会にも描かれています。

明治時代には高岩寺・とげぬき地蔵も巣鴨に移転、昔ながらの下町情緒と信仰にあふれる街です。参拝客や買い物客でにぎわいながらも、どこか懐かしい空気が漂います。

明治時代には近くに染井霊園も造営され、いくつかの寺院が著名な人々のお墓とともに移転してきました。染井霊園の近隣は、江戸時代、植木職人の里として栄えた「染井村」と呼ばれたところ、ソメイヨシノが生まれた場所でもあります。巣鴨一帯は菊作りでも有名、例年11月には菊祭りも開催されます。

◆今回の見学会では「地蔵通り商店街」を歩き、染井霊園で著名な人々の墓を訪ね、周辺の寺院を巡ります。慈眼寺や本妙寺といった古刹が点在し、巣鴨のもう一つの顔である「寺町」の趣が感じられます。明暦の大火の火元説で知られる本妙寺には遠山金四郎をはじめとして千葉周作などの墓所があり、江戸の歴史を今に伝える佇まいが印象的です。

◆11月の澄んだ空気の中、商店街の活気と、染井の歴史、寺院の静けさを一度に味わえる散策に行ってみませんか。(11月６日から「すがも中山道菊まつり」も開催される予定)

- 開催日：11月7日(土)　小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時15分　終了：12時45分(時間厳守)
- 集合場所：JR山手線巣鴨駅正面出口・都営三田線巣鴨駅Ａ1出口
- 解散場所：都電荒川線　庚申塚駅
- 定員：100人(会員外は申込時氏名・住所・電話連記)
- 申込受付開始：郵送９月1日、ネット10月14日
- 申込締切：郵送・ネットとも10月28日(水)必着
- 参加費：会員1,000円　会員外1,200円(当日払い)

【企画担当責任者】大塚　仁(事業部会)

▲真性寺

▲高岩寺洗い観音

[今後の催事予定]

●これまでご案内した催事以外に、今年度は下記の催事が予定されています。

- 2026年12月５日(土)
  友の会セミナー　「江戸の飛脚」(仮)
  (講師・巻島　隆)
- 2027年１月７日(木)
  見学会　「恒例七福神巡り　下谷七福神」
- 2027年３月(予定)
  友の会セミナー　「小栗上野介と勝海舟」(仮)
  (講師・岩下哲典)
- 2027年３月(予定)
  見学会　「切絵図片手に江戸散歩」

※詳しいご案内は次号以降に掲載されます。

[催事の申込方法]　催事に参加ご希望の方へ

はがきでのお申し込み

会報『えど友』の催事案内をご覧になり、以下の要領で、はがきでお申し込みください。

◆通常はがき（85円）に、

①催事名（略名可）と開催日　②会員番号（必須）
③氏名　④電話番号を明記

＊同伴者は、氏名、電話番号を連記。見学会のみ保険加入のために同伴者の住所も必要です。

◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１
江戸東京博物館「友の会事務局」

◆セミナー、見学会の申し込みは１通で複数の催事申し込みも可です。古文書講座は、古文書講座だけでお申し込みください。講座の複数申し込みは可です。

◆セミナー、見学会の参加者には、締切数日後に「参加のご案内」を一斉にお送りします。それまでお待ちください。

◉ WEB でのお申し込み

催事案内ホームページで、会報『えど友』やネットの催事案内をご覧になり、WEB 経由、申込フォームからお申し込みください。

◆メールアドレスを登録されている方には：

催事案内がホームページに掲載された時、一斉メールを発信してお知らせいたします。
また、WEB による申込受付の開始時に、メール一斉発信で申込フォームの URL などをお知らせいたします。

◆参加者には締切後、メールで「参加のご案内」をお送りします。

◉共通事項

●応募者多数の場合は抽選となる場合がありますのでご了承ください。

●催事参加の際は本人確認のため会員証をお持ちください。

●友の会への連絡・問い合わせ先

電話の場合：０８０−７５９９−３３００
火曜日・金曜日
10 時〜 12 時・13 時〜 17 時
（この曜日、時間以外は不在になります）

はがきの場合：〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１
江戸東京博物館友の会

メールの場合：　edotomo2001@gmail.com

会員優待のお知らせ

●江戸東京博物館リニューアル記念特別展
NHK 大河ドラマ特別展「豊臣兄弟！」

会　期：９月15日(火)〜11月８日(日)
会　員：一般1,050円、高・中・小学生無料
同伴者：一般1,680円、高・中・小学生無料
●(注)割引を受けられる同伴者は１人だけです。

次回予告

●江戸東京博物館リニューアル記念特別展
「円山応挙　リアルの先へ 空間革命」

会　期：11月28日(土)〜１月24日(日)

企画展のご案内

●「浮世へのいざない ―江戸博×出光コレクション初共演」

会　期：８月25日(火)〜９月27日(日)
会　場：常設展示室内 ５階企画展示室

次回予告

●「日米交流　知のかけはし ―ラトガース・カレッジと幕末明治の日本人留学生―」

会　期：10月24日(土)〜12月６日(日)
会　場：常設展示室内 ５階企画展示室

休館日

9 月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

10 月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

広報部会員募集中

会報『えど友』を一緒に作りませんか？

セミナーや見学会の取材・撮影、独自企画の執筆など、ご自身の都合に合わせて得意なことで参加できます。
ホームページ担当も同時募集！「できる時、できる事を」モットーに、楽しく活動しています。
まずはメールでお問い合わせください。

edotomo2001@gmail.com

会報＜えど友＞第 128 号
令和８年９月１日発行（奇数月１日発行）
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail: edotomo2001@gmail.com

発行人：川上由美子(会長代行)　編集長：菊池真一
中村貞子、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、光田憲雄、
横島利明、福田　徹、秋元康良、前田卓雄
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１−４−１　電話080-7599-3300